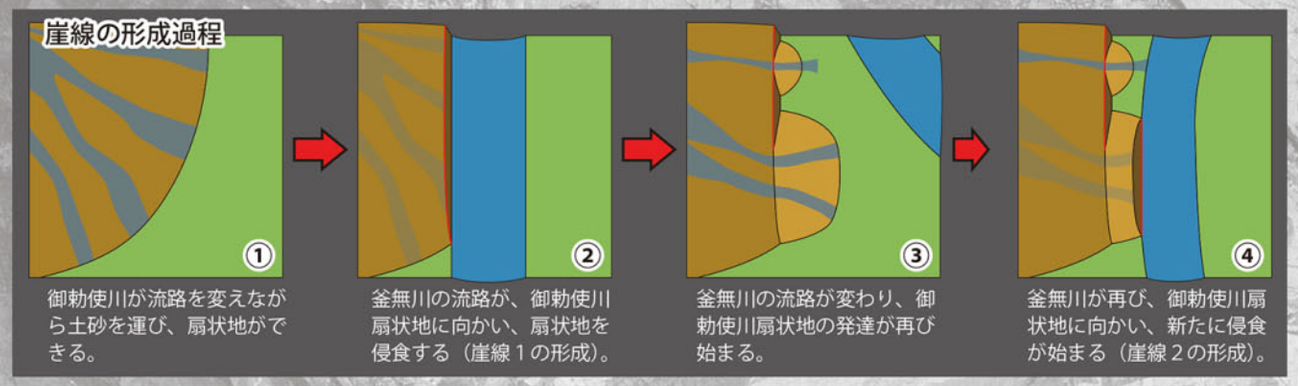
ふるさとの誇り 149

博レポート

人と自然の営みを映す ～御勅使川扇状地末端の侵食崖線～



御勅使川が流路を変えながら土砂を運び、扇状地ができる。

釜無川の流路が、御勅使川扇状地に向かい、扇状地を侵食する（崖線１の形成）。

釜無川の流路が変わり、御勅使川扇状地の発達が再び始まる。

釜無川が再び、御勅使川扇状地に向かい、新たに侵食が始まる（崖線２の形成）。

徳永・御崎遺跡
縄文時代後期の住居址（部分）

徳永・御崎遺跡からの眺望
縄文人も見た景色

金丸氏館跡
（現長盛院）

市の東辺に沿って南北に走る県道南アルプス甲斐線（旧若草双葉線）や、白根高校から野牛島の交差点を経て、ふるさと文化伝承館（樹園）に向かう市道に沿って西側を見ると、市域を南北につらぬいて崖が続いているのがわかります。これは、御勅使川が土砂を運搬して形成した扇状地を、東から釜無川が侵食してできたもので、その高さは、徳永の熊野神社付近で最大十五ｍ程にもなります。

この崖線、よく見ると現在の白根高校北側付近の上下で食い違っているのですが、その理由は、上に示したとおり、形成時期の差であると考えられます。では、それぞれの形成時期は、いつ頃だったのでしょうか。

北側の崖線の先端部上には、上八田から徳永を中心に、縄文時代後期（今から約三五〇〇年前）の遺跡（徳永・御崎遺跡など）が濃密に分布することが知られています。水害を避け、眺望の良いロケーションを意識して集落が形成されたと考えられますから、この付近の崖は、縄文時代にはすでに存在し、中世には、現在の長盛院の場所に、この崖を天然の防御ラインとして、武田家に仕えた金丸氏が館を構えます。

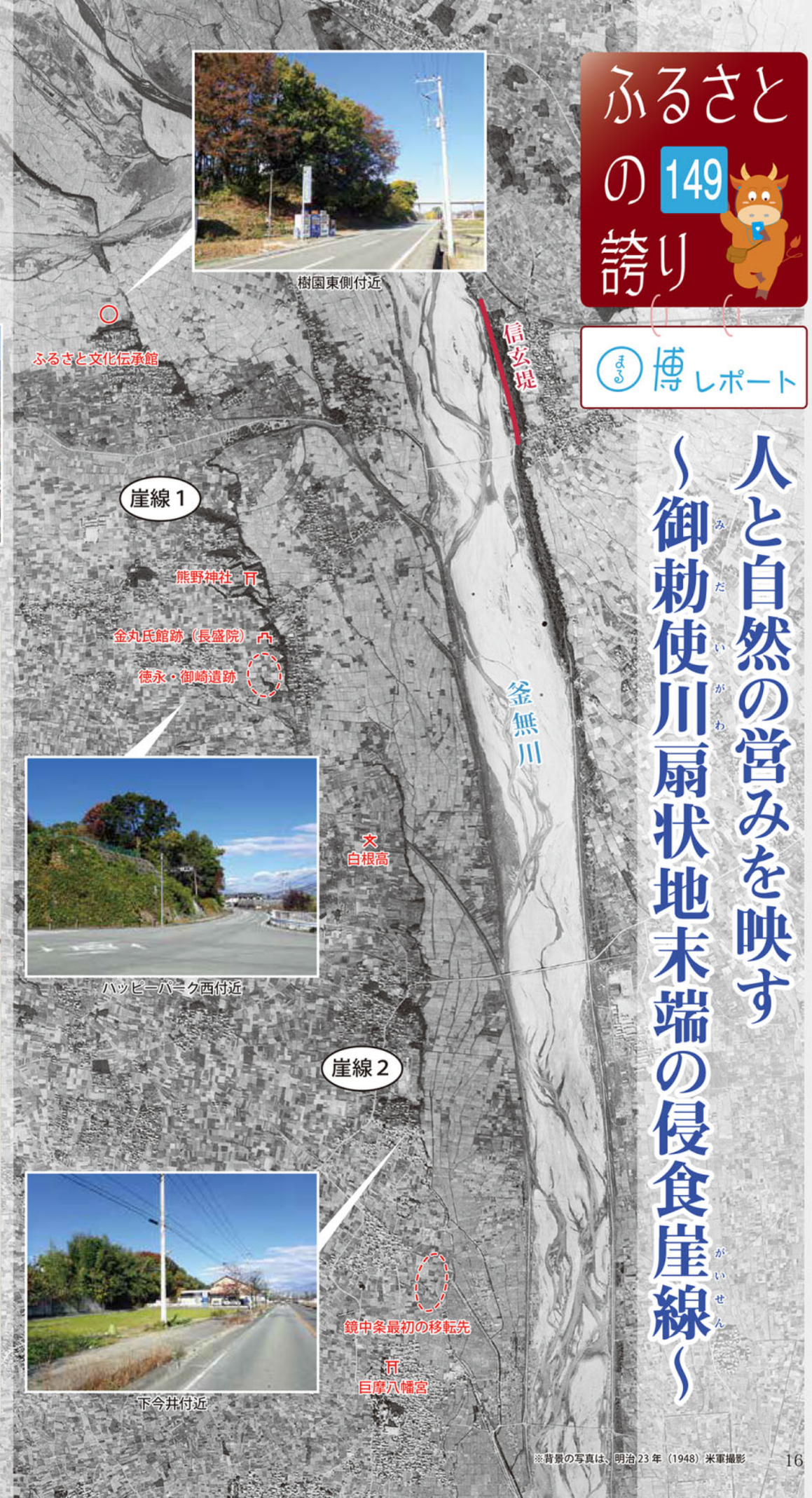
南の崖線の形成時期については、鏡中条の巨摩八幡宮の社記がヒントになります。これによれば、神社を含む鏡中条村は、天文年間（一五三二～五五）に釜無川が押し寄せ、流されてしまったので、天文十三年（一五四四）に「坂の上（御勅使川扇状地の上）」に移転した。しかし、慶長年間（一五九六～一六一五）、またも水害に襲われ、境内を含め村が「だんだんと欠けていき」、慶長十七年（一六一二）現在の場所に再び移転したのだといいます。天文年間頃から再び市域に向かうようになった釜無川の流れは、本年九月号のこの欄で紹介もしたとおり、永禄三年（一五六〇）頃、竜王に信玄堤が構築され、その後、順次下流に堤防が延伸されると確定的となり、御勅使川扇状地を再び侵食していったのです。

市域を南北につらぬく崖線、その北半分はダイナミックな自然の営み、南半分は、これに加え、人々の歴史的の営みによって大地に刻まれたものでした。御勅使川扇状地末端部の崖線から、数千年にわたる人と自然の営みを知ることができます。

文／写真　文化財課

巨摩八幡宮社記（抜粋）『甲斐国社記・寺記』所収

天文年中釜無川切込社頭神領不残流失仕候／数十戸之社人不残離散仕候由
于今其所を神宮寺河原ト申候／同暦十三甲辰年八幡宮を坂之上江引勧請仕候
其後慶長年中又々釜無川切込社地も段々欠込候故同暦十七年壬子年御旅所之社江引勧請候



※背景の写真は、明治23年（1948）米軍撮影